

# ホノルルにおけるエスニック居住区の形成と変化<sup>(1)</sup>

——日系居住区のマノアとモイリイリに注目して——

## 高木（北山）真理子

ハワイはアメリカの州としては歴史が浅く、昨年2009年に州昇格50周年を迎えたばかりである。現代の日本人にとって、ハワイといえば「南国の楽園」といったイメージばかりが強いのだろうが、特に明治初期からの数十年間、ハワイは、日本人が労働者として「一旗」を揚げようと渡航した海外移住先のひとつであった。当時の日本人渡航者はハワイの砂糖プランテーションの労働者として身を粉にして働き、故郷に錦を飾る夢を実現しようとした。しかし現実は厳しく、当初の希望通り数年でその夢を遂げられたものは一握りであった。かなりの数の日本人移民は移住先で何とか成功しようと努力を続けるうちにその滞在期間は長くなり、次第にハワイへ定住するようになった。他の国や地域からやってきた移民労働者とともに、ハワイ社会を織りなす多様なエスニック・グループの一要素を形成するようになっていったのである。

日本人移民一世が、ハワイの砂糖プランテーションでどのような労働条件のもと、どのような苦勞をしながら働いたのかについては、移民に関する社会史や移民自身による自伝、移民周年誌などに描かれてきた。さらに、多くの移民史研究者による研究は、移民の一世やその子供の世代である二世の生活を政治、経済、社会、文化という多様な側面から考察してきた。その中には一世から二世／三世へという世代間の変化や、移民地における日本文化の変容、アメリカへの同化、言語の問題なども含まれる。特にハワイにおいては、日系が一時はハワイ全体人口の40パーセント近くを占めていた。そのためホスト社会の文化と異なる文化をもったいわゆる「目立つ存在」とされ、ホスト社会からアメリカ文化への同化を迫る「アメリカ化運動」の標的とされた。日系はハワイ社会に多大な貢献をしつつ日々努力を重ねていたが、「労働者階層」からの脱出は容易なものではなかった。その社会的地位の中流階層への上昇は第二次大戦後二世世代の社会進出を待たねばならなかったと考えられている。しかし、砂糖産業が成長し、プランテーションに多様な国から多くの新しい移民労働者が入るにつれ、古くからいた移民はプランテーションを出て契約農民になったり、町に出て商売を始めたり、と、少しずつでも「よりよい生活」を目指した。そのような日本人移民一世たちの社会的地位の上昇は、日本からハワイにやってきてからどのような場所に住み、どのように移動をし、ど

のような職業についていったかを追うことで、よりはっきり見えてくるのではないだろうか。

そこで本稿では、ハワイの日本人移民一世の社会的地位の上昇について、特に人口の集中するオアフ島ホノルル市の中で日系が多く住んだと言われる二つの地域、マノアとモイリイリについて考察してみたい。これまで、ハワイの日系人の成功過程についての研究は、先述したように一世から二世への世代交代とともに語られ、二世の成功で達成されたと言われてきた。しかし、日系人が砂糖プランテーションを後にしてから住みついた居住区の特徴や彼らの地理的移動自体に焦点を合わせた研究はまだ多くはない。アメリカ本土では、移民の社会的上昇は、移民の居住区の移動から見た場合、「下町から山の手へ (From downtown to uptown) の移動」として語られることが多いが、ハワイにはこの考え方は当てはまるのかを検証してみたい。またそのプロセスで、ハワイにおける移民労働者のつくったエスニック居住区の特徴を明らかにしていきたい。

## 1. プランテーションにおける多人種移民労働者導入政策

1778年、探検家クック (Captain Cook) に「発見」されたとき、ハワイは先住ハワイ人のみの住む社会であった。それを現在のような多人種／エスニック社会に変身させたのは、19世紀半ばの砂糖会社経営者 (欧米系白人) によるプランテーションへの移民導入政策であった。19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて導入した多様な移民労働者がハワイのプランテーションの方策によって各々のエスニック居住区 (移民キャンプ) に住み、定着していったことで、ハワイは早い時期から多人種／エスニック・多文化社会となっていたのである。

クック来訪時30万人はいたといわれる先住ハワイ人は、その後1853年には7万人ほどに激減してしまった (Lind 1964, 20)。欧米人がもたらした病気に対して免疫がなかったことが、人口激減をもたらした大きな要因であった。欧米人はハワイに住みつき、ハワイ王国の政治にかかわると同時に、農業や牧畜をてがけるようになった。アメリカからやってきたキリスト教宣教師や貿易商の子孫らは砂糖栽培の将来性に気づき、資金をつぎ込み大規模なプランテーションを建設した。そこで労働力需要が高まり、減少していく先住ハワイ人では需要を満たしきれず、まず導入されたのが中国人労働者であった。しかし中国人移民の数が次第に増加し、1880年代にハワイの外国人人口の半分以上になると、砂糖産業を取りしきる五大財閥ビッグファイブ (Big Five)<sup>(2)</sup> はひとつのエスニック集団が労働者の多数派を占めていることに脅威を感じ、彼ら以外の国からの移民労働者を導入する必要から、ポルトガル人<sup>(3)</sup> や日本人の導入に積極的になった。

ポルトガル人はヨーロッパからの移民で、人種的・文化的にはハワイ社会の政治経済的権力を掌握していたビッグファイブに関わる白人エリートとの共通点が多かったのだが、プランテーション労働者という立場にあったため、人口統計の中でも「白人

表1 ハワイへの移民数（1852-1899）

エスニック・グループ	人 数	時 期	全体比 (%)
中国系	56,700	1852-1897	39.0
日系	68,279	1885-1899	46.7
ポルトガル系	17,500	1878-1886	12.0
太平洋系	2,500	1878-1885	1.7
ドイツ系	1,300	1882-1885	0.8
合計	146,279		

(出典 Beechert 1985, 86 Table 3より作成)

(white)」には数えられない特殊な存在であった。男性の単身での移民が多かった中国人と違い、ポルトガル人は家族とともに移民してきたため、激減する先住ハワイ人の穴を埋める労働力として、プランターからの期待を背負っていた。日本人は1868年に「元年者」と呼ばれた最初のグループが移民してきたが、こちらも激減する先住民人口を補う移民として、さらに中国人の後を継ぐ労働者としてプランターの期待を背負い、1885年からはハワイ王国政府と明治政府間の移民契約のもと大量の日本人がハワイへ到着している<sup>(4)</sup>。表1によれば、1852年から1899年までに68,279人の日本人が移住した。1893年にハワイ王国が転覆して共和国となり、1898年にアメリカに併合されるという劇的な変化の中にあつた時期にも、ハワイ諸島の砂糖プランテーションでは日本からの移民労働者がどんどん入ってきた。基本法（Organic Act）の下でハワイが正式にアメリカの準州となった1900年、ハワイの日系人口は61,000人余りであり、全体人口の39.7パーセントになっていた（Nordyke 1989, 178-181）。その多くが町から離れた「田舎」に点在した砂糖プランテーションに暮らす労働者であった。しかし、1909年、日本人労働者がプランテーションでの待遇改善のために大規模なストライキを起こし、プランテーション・キャンプから追放され、結果的に都市へ出ていくようになると、その日本人の穴を埋めるため、米西戦争後アメリカの領土となっていたフィリピンからの移民が多く導入された。プランターは砂糖産業に本格的に取り組み始めた当初から、より多様な場所からの移民を入れる方向にあつたので、既に19世紀の終わりごろから、絶対数は少なかったもののアメリカ西海岸、他の太平洋諸島、スカンジナビア諸国やドイツ、さらにはロシアからも労働者を入れた。その後朝鮮半島からの労働者や、プエルトリコ人なども導入した。そしてその多様な国からやってきた労働者をプランテーションで各々出身国別の居住区であるキャンプに住ませた。プランテーションにやってきた時期の違いのせいもあるが、出身国別で賃金水準や待遇も異なっており、異なる人種／エスニック・グループが同じ労働者階級としての連帯感を共有するのを妨げる要因ともなった（表2参照）。このようなプランターの方策は分断政策（Divide and Rule）と呼ばれ、実際に異なる人種／エスニック・グループの労働者が協力し、人種の壁を超えて

表2 契約農業労働者の賃金／月  
(1888-1890)

エスニック・グループ	賃 金
ポルトガル系	\$19.53
ハワイ系	18.58
中国系	17.61
太平洋諸島系	15.81
日系	15.58

(出典 Moriyama 1982, 266より作成)

の労働争議の発生を妨げるのに効果があった。そしてハワイでは社会の最底辺である砂糖プランテーション労働者という地位から、ほとんどの外国人移民が社会的階梯 (Social Ladder) を上り始めたことから、ハワイの社会はビッグファイブ関係者である一握りの白人エリートが政治的・経済的・社会的権力を掌握し、それ以外の大多数が社会の底辺の労働者階級に属しているという、極端な二極分離構造を形成していたのがわかる<sup>(5)</sup>。そしてプランテーションにおいて、労働者階級は、労働者という階級で自らを意識することはなく、人種／エスニシティに基づいて自らを規定していた。つまり異なる国籍・文化・言語に基づくグループに分断されたことによって、自らも他国の人々と「異なるグループ」と理解していたのである<sup>(6)</sup>。それでは、プランテーションでの契約労働を終えた移民労働者は、その後都市のどのような地区に住み、どのような仕事に就いたのであろうか。

## 2. 都市のエスニック居住区——エスニシティと階級の交差点

久武 (1999, 359) は、ハワイの都市におけるエスニシティの研究には、「プランテーション経済の中で一貫して採用されてきた労働者のエスニック別分離政策との関係で歴史的に分析する視点」が欠けており、今後はこの視点をもって研究をすすめるべきであると述べた。本章ではまず、ホノルルがどのようなプロセスを経て都市に変貌していったのかを追いながら、郊外のプランテーションでの労働契約を終えるなどして都市に入ってきた各人種／エスニック・グループの労働者たちがどのような場所に住みついて行ったのか、そしてどのような職について居住区をつくっていったのかをまず概観したい。

ハワイ王国にニューイングランドからのプロテスタント宣教師団が到着したのは1820年のことであった。その当時ホノルルは人口数千人の町であり、草ぶきの家が多く建ち並び、石造や木造の家は数えるほどしかなく、商店も少なかったという (Chow 1983, 169)。しかしアメリカ人宣教師たちの影響で、教会のみならず、次第にアメリカ東海岸風の家が建つようになった (Chow 170)。国王カメハメハ三世 (在位: 1825-1854) がホノルルを王国の首都と定め、市制をひいたのは1850年であった。1853年、

ホノルル市の総人口は11,445人で（久武 1999, 362; Chow *ibid*）、王国の外国人のほとんどがここに住んでいた。しかしホノルル市全人口の80パーセントは先住ハワイ人であった（久武 *ibid*）。

ホノルルに入ってきた白人と先住ハワイ人以外のエスニック・グループは、やはり中国人が最初であった。中国人移民は実は王国の初期からハワイに住むようになっていたが、数も少なく、ほとんどが商人や農場経営者などビジネスに携わる人であった。1852年になって、ハワイ王立農業協会（Royal Hawaiian Agricultural Society）が砂糖労働者として中国人の導入を開始した。ハワイ王国とアメリカとの間に結ばれた1876年の互恵条約によって二国間の関税障壁が撤廃されると、砂糖栽培の規模は急激に拡大し、移民労働者の需要が増大した。導入された中国人移民労働者の多くは砂糖プランターのもとで働いたが、中国人の経営する米を栽培する農場に働く者もいた。1878年に5,916人であった中国人人口は、1884年には17,939人と約3倍に増加した。砂糖プランテーションにおける中国人労働者の数が多くなっていくにつれて、プランターが日本人やその他の国からの移民労働者を好み、中国人労働者は郊外のプランテーションからホノルルなどの町へ移動していった。統計を見ても、ホノルルの中国人人口は1878年の1,299人から1884年の5,225人に増加している。1850年頃からホノルルのダウントウンに同じ言葉、同じ文化背景をもつ者たちが自然に集まり、チャイナタウンができた。1880年代になるとアメリカ西海岸における中国人排斥運動の高まりの影響を受け、ハワイにおいても排斥気運が高まっていたため、ホノルルにやってきた中国人の多くが同国人の近くに住むことを安全と考え、チャイナタウンに住みついた。1896年にはハワイの中国人21,616人のうち36パーセントにあたる7,693人がホノルルに集中していた<sup>(7)</sup>。

19世紀のホノルルにおいて、移動手段は足であった。港が町の中心であり、その周りに政府の建物や教会、銀行、商店、レストランなどが立ち並んでいた。1888年になってやっとラバが引く客車が線路上を走る「路面馬車」が登場し、それがトロリー電車として電動化されたのは1903年であった。

1893年のハワイ王国の滅亡、1894年のハワイ共和国の成立、そして1898年のアメリカによる併合と、ハワイは1890年代に大きな政治的变化を経験した。その間にも、ホノルルには中国人や日本人、ポルトガル人などが流入し、さらに欧米白人（ハオレ）の数も増加した。

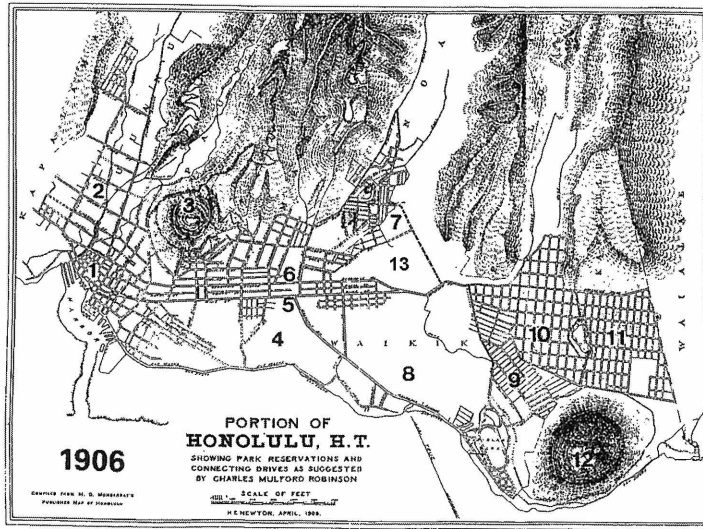
アメリカ領になってからも砂糖プランテーションでの日本人労働者は増加を続け<sup>(8)</sup>、契約を終えたポルトガル人労働者が日本人に押し出されるようにホノルルへ流入してきた。ポルトガル人は移民グループの中では、自らの言語／文化に対する固執性が弱かったと言われるが、それでもホノルルに入った当初は、やはり同国人との集住が見られた。彼らはホノルル内でもパンチボウルの丘陵地や（Chow 1893, 363）、カリヒの谷のあたりに住みつき、カトリック教会がポルトガル人の生活・文化の中心となる役割を

果たしたという (Lind 1980, 64)。1909年には、オアフ島の砂糖プランテーションで大規模な日本人労働者によるストライキが勃発し、プランターはストライキに参加した労働者をプランテーションのキャンプから追放したため、多くの日本人労働者が一気にホノルル市に入ってきた。日本人コミュニティはホノルルにいるリーダーを中心に食糧などの必需品をストライキ参加者に提供し、寺社や日本語学校の建物に住ませた。その後ストが終わってももとのプランテーションに戻らずにホノルルで暮らす日本人労働者もいたため、ホノルル市の日本人人口は増加することになった。ハワイの政治権力を握っていた白人エリートの中には、この日本人によるストライキを、ハワイを乗っ取ろうとする「日本国の陰謀」と考える者もいたほどである<sup>(9)</sup>。このようなハワイの日本人に対する不信感は、ハワイ準州における公務員資格に「アメリカ市民であること」という規程を導入することにつながった。その結果、帰化不能（アメリカ市民になることのできない）の外国人居住者には、公務員になる道が閉ざされたのである (Chang 1996a, 114; 1996b, 11)。この規程の目的が、日本人一世住民であったことは明らかであり、こうした規程によって、日本人一世の職業選択を狭めたことに留意する必要がある。このような制度的人種主義 (Institutional Racism) が一世移民の職業上の上昇を押しとどめ、日本人のコミュニティの中で生活する必要性を増大させた要因のひとつといえるのではないか。

ハワイがアメリカの準州となった1900年から1930年代にかけて、ホノルル市は「都市」としての行政組織の整備を着実に進めていた。1907年にはホノルル市郡 (The City and County of Honolulu) を設置し、1911年には最初の土地区画規制法 (Land Subdivision Regulations) を制定、さらに1922年には新築地建設法 (New Building Code) 及びゾーニング法 (Zoning Act) を制定し、住宅の建設基準を次々に厳しくしていった。

少し細かくその時期の変化をたどると、まず1906年頃の住宅地の開発 (図1参照) は、久武 (1999, 363) によれば、「ワイキキ (Waikiki) やカカアコ (Kakaako) などの中間の低湿地を避けて、東方のダイヤモンドヘッド (Diamond Head) やカパフル (Kapaehulu) などの高燥地に展開して」いたという。そして20世紀初頭プランテーションを後にした日本人は、住宅開発のされていない、マッカリー (McCully), モイリイリ (Moiliili), カカアコなどの低湿地周辺に定住しはじめたのである。そのあたりは先住民のタロ芋畑や中国人の稲作水田や養魚地が散在していたという (久武 ibid)。またホノルル西方のダウントウン地域周辺では、前述したラバの引く客車に取って代わり、1903年にヌウアヌ (Nuuanu) 川に沿ってHR&L (Honolulu Rapid Transit and Land Company) がトロリー電車を走らせた。HR&Lは沿線に住宅地パシフィック・ハイツ (Pacific Heights) の開発を手掛け、主に白人からなる中／上流階層を引きつけた (久武 ibid; Chow 1983, 174)。

1911年の土地区画規制法の結果、高台の涼しいマキキ (Makiki) やカレッジ・ヒルズ



1. ダウンタウン 2. ヌアヌー川 3. パンチボール 4. カカアコ 5. キング通
6. ベレタニア通 7. マノア 8. ワイキキ 9. カパハル 10. カイムキ 11. カハラ
12. ダイヤモンドヘッド 13. モイリイリ

図1 1906年におけるホノルル市  
(久武 1999, p. 364を改変)

(College Hills), マノア (Manoa) に欧米系住民のための住宅が建設された。1920年に起きたオアフ島の砂糖プランテーションにおける日本人とフィリピン人労働者による大規模なストライキでも1909年の日本人大ストライキと同様、スト参加労働者がプランテーションから追い出され、ホノルルに流入した。大量の労働者の流入はホノルルの居住環境の悪化につながると懸念された。それは統計にも表われており、1920年にはホノルルに24,000人の日本人がおり、ホノルル全体人口の30パーセント近くを占めるようになっていた (Lind 1980, 66)。そこで、ホノルル市はこうした労働者が住めるような住宅の需要に応えねばならなかったのだが、一方ではホノルル市に住む中流階層の住宅地に悪影響が及ばないような施策が講じられた。Chow (1983, 173) が指摘し久武 (1999, 365) が強調しているように、「市当局がホノルル市中心部のビジネス地域や中流階層の住宅地に、プランテーションから流れ込んでくる労働者たちの『noxious and incompatible activities (中流階層の生活に対して有害であり、共存しえないような活動——括弧内引用者注——)』が入り込んでこないように」1922年のゾーニング法を制定したのは明らかであった。つまりゾーニング法は、中国人や日本人が既にホノルル市の中で従事していた養豚業、養鶏業、屠殺業などにさらに多くの人々が従事し始めることで、これらの業種の市内の他地域への拡大してゆくのを懸念し、それを法的に阻止する効力をもったのである。これは久武 (ibid) が指摘するように制度的な分離であり、制度的人種主義の表れである。さらに同じ1922年の新築地建設法 (New Building Code)

はワイキキやプナホウ (Punahou) 地区の新設住宅に規制を設け、ある一定の規格に見合わない住宅建設を禁じた。そこで、この地域には規格外の小さな建物は建たなかったが、そのかわりホノルル西部のパラマ (Palama) やチャイナタウンに狭小な低家賃アパートや低層集合住宅が集中することになった。またホノルルの東方では、ワイキキの北部低地、カカアコ (Kakaako), マッカーリー (McCully), モイリイリ (Moiiliili), ワイアラエ・ヌイ (Wailae Nui), ワイルペ (Wailupe), パロロ (Palolo), カリヒ・ウカ (Kalihiki Uka) などが小規模な漁業、農業に従事する移民たちの居住地となっていく。この地域は先住民や中国人、日本人らのタロ芋畑、養魚池、稲作水田、養豚・養鶏地、蔬菜・花卉・果物栽培地として使われ、その生産品はダウンタウンの市場に持ち込まれるようになったのである。1909年から36年までの約30年間、ホノルルの日本人一世の従事した職業は変化をしているものの、多いものは家内労働、商店及び事務員、大工・石工・ペンキ職、農耕・畜産労働者、漁業、工場労働者などであった (飯田 2003, 71)。一方、フィリピン人は1922年には砂糖プランテーション人口で日系を追い越したが、1920年代、30年代にホノルルに流入するようになり、特に港に近いイウィレイ (Iwilei) 近郊に集住し、工業地区や軍事地区での仕事につくようになった。

1920年代、30年代には軍事地域の拡大、パイナップル業の拡大、トロリー電車の拡充などで、新しい多様な雇用が生み出され、本土から白人中流階層の家族が次々にハワイにやってきた。彼らの住居が必要になっていくが、1920年代には、マノア高地 (Upper Manoa) やマウナラニ・ハイツ (Maulanani Heights), パシフィック・ハイツ (Pacific Heights), セントルイス・ハイツ (St. Louis Heights), ウィルヘルミア・ライズ (Wilhelmia Rise), さらにダイヤモンド・ヘッド (Diamond Head) の丘陵地などの高台の住宅地が次々に開発され、主にこれらの白人中流階層の居住地となっていく。多くの地域にはトロリー電車が行き来したため、ダウンタウンと家を行き来するための交通の便も良かったのである。また留意しておきたいのは、1924年以降、中流階層の白人からの要望によって、公立学校に英語標準学校が導入されたことである。これらの白人家庭では、いわゆるハワイの上流階層の白人エリートのように私立の学校に子弟を入学させる経済力はなかったが、わが子がピジン英語を話す子どもたちと一緒に教育を受けさせることを快く思わなかったため、英語能力の高い生徒のみが通う公立の英語標準学校を設立させたのである。これも労働者階層の子どもたちが通う通常の公立学校と公立英語標準学校との間の制度的人種主義と呼ぶことができよう。労働者階層の子どもたちと上/中流階層の子どもたちは、居住区が分断されていただけでなく、公立教育機関という、原則的に平等の機会が与えられなくてはならないところにおいてさえ、一種の分離が行われていたわけである。

第二次大戦前までのホノルルは、特に涼しい高台に上/中流階層の欧米系白人が住み、ダウンタウン近郊や低湿地に漁業や市場向け農業、小売業、工場労働などを営む中



国人、日本人が住むようになり、さらに軍事産業の発達に伴い、港近くにフィリピン人が住むようになっていくというプロセスをたどっていった。先住ハワイ人もまた、漁業、農業を営んでいたが、その数は限られており、特に都市の中に移民労働者たちのような集住地を形成することはなかったといえよう。

### 3. 戦前の日本人居住区——マノアとモイリイリ

現在、マノアやモイリイリは、ホノルルの中でも観光のメッカであるワイキキに程近く、特に日系住民の多い地区という印象がある。現在のモイリイリには比較的小さな低層でエレベーターのない集合住宅や小ぶりの一戸建てが多いが、マノアは1区画が大きく、豪華な一戸建て住宅が並んでいる印象がある。マノアやモイリイリはいつ頃から日系が住むようになり、どのような変化をとげたのだろうか。

マノアは、ワイキキのすぐ北隣に接するモイリイリ地区のさらにすぐ北にある、緑の多い丘陵地で、閑静な住宅地である(図2参照)。マノア内ではハワイ大学のマノア校キャンパスが一番モイリイリに近い。マノア清流(Manoa Stream)が流れ、住宅地から奥に入れば滝がある。古くは先住ハワイ人がタロ芋栽培をしていたが、18世紀末に欧米白人が住むようになった。20世紀への転換期、日本人の姿が初めてマノアに見られるようになったという。マノアでは、マノア東部(East Manoa)とマノア高地(Upper Manoa)に主に日本人が集住するようになっていくが、その最初はマノア東部に新しく開発された住宅地に住むようになった白人家族のもとで家内奉公人(Domestic Servants)として働いた日本人夫婦である。20世紀前半ホノルルで働く日本人に比較的多かった家内奉公人は、夫婦の場合、夫は庭師や運転手の仕事をし、妻は食事の支度や子守、洗

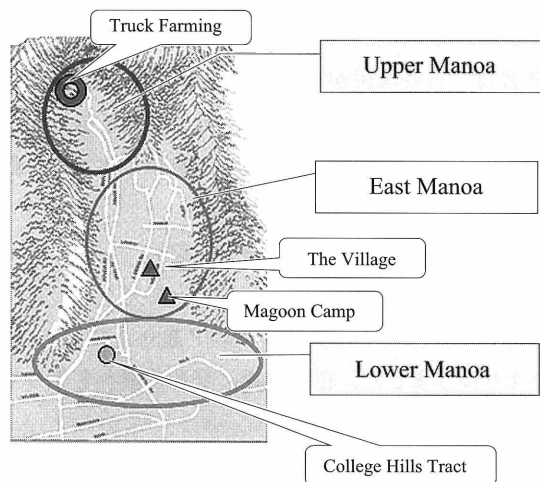


図2 マノア地区

(Manoa Residents, *Manoa: The Story of a Valley*, 1994. より作成)

濯をした。マノアは雨が多いため、洗濯を請け負う女性は洗濯ものを家の中で乾かしたという。マノア住民の手になるマノアの歴史『マノア：谷の歴史 (*Manoa: A Story of a Valley*)』(Manoa Valley Residents, 以下 Manoa Residents と略記 1994, 162) によると、「洗濯業の女性たちの家は多く2階建てになっており、2階が家族との住居で、1階は打ちつけの土間のままで、そこが物干し場に使われていた」という。次第にマノア東部、マノア高地に住む日本人が増加してくると、マノア東部のイースト・マノア通り (East Manoa Road) に沿って、食料品店やガソリン・スタンド、タクシー乗り場などの小商店を開く日本人が増加した。マノア東部の日本人地区は「マグーン・キャンプ (Magoon Camp)」と呼ばれ、イースト・マノア通りに生まれた商店街は「ヴィレッジ (The Village)」として知られるようになった。

一方、マノア高地には契約農民として市場向けに花や野菜を栽培する日本人農民が多数住むようになった。1920年代、この地域の地主であるビショップ地所 (Bishop Estate) がマノア丘陵地の南西部を2～4エーカーの区画に区切って貸し出した (Manoa Residents 1994, 194)。このチャンスに飛びついたのが日本人農民であった。1930年には200ほどの日系家族が住み、ラディッシュやニンジン、インゲン、アライモ、大根、ごぼうといった野菜に加え季節の花々を栽培した。農民たちの仕事は朝が早く、午前2時ころにはダウントウンのリバー通り (River Street) にあった卸売市場に注文に応じて出荷を済ませた。いわゆるフォードのモデルT (Model T) などの大衆小型車が大量生産されて一般に普及したため、マノアの日本人農民にも車や小型トラックの所有が可能になっていた。マノア高地での農民が生計を立てられたのも車のおかげといえるであろう。またマノアには日系酪農家が3軒あり、そのうちの2軒は生産品をマノア内で売りさばいていたという。また日系ばかりでなく、フィリピン系や中国系の農場もあり、バナナやタロ芋を栽培していた (Manoa Residents 1994, 194)。

1920年代から30年代は、日系移民が大家族を養わなくてはならなかった時期である。子どもの数が多かった移民家族では、子どもたちも家業を手伝った。家計に足しになるような仕事を子どもたちも進んで行ったのである。かつてマノアに住んでいたある二世は子ども時代を思い出してこう語っているという。

私たちは卒業式で売るためにガーデニアやデイジー、ジンジャーでレイを作りました。両腕に山のようにレイを下げて、歩道に立って売りました。メモリアル・デイには墓地に行って花を売りました。ベレタニア通りとプナホウ通りの角にたつて、通行人に花束を売り歩きました。花束を手にかから家へと売って回ったこともあります…… (Manoa Residents 1994, 195)。

マノアに住んだ二世の子ども時代を語るオーラルヒストリーをひも解くと、東マノア地区であろうとマノア高地であろうと、当時の日系家族がいわゆる典型的なエスニック居住区 (ethnic enclaves) に住んでいたのがわかる。子どもたちは現地の公立学校であ

るマノア・スクール (Manoa School) に通って英語でアメリカの理想や民主主義を学び、放課後は日本語学校 (Manoa Japanese Language School) へ行っていた。近所には仏教のお寺があった。子どもたちは手作りの凧をあげたり、マノア清流の池で泳いだり、峰のてっぺんまでハイキングしたり、水をぬいて乾燥させたタロ芋畑で野球やフットボールをして遊んだ (Manoa Residents 1994, 162)。興味深いことに、子どもたちは他人種の子どもたちと遊ぶことはあったのだが、白人の子どもたちだけとは遊ぶことはなかったという。それは白人の子どもたちと接する機会がなかったからだった。このことから、当時のマノア地区で、白人と非白人とに間に明確な人種／エスニックの境界線 (racial/ethnic line) が引かれていたことがわかる。これはまた、階級の境界線 (class line) とも重複していたことがわかる。逆に、日系コミュニティの中では、正月のもちつきなどの文化的行事が行われたし、時々、日本の映画を上映するムービーナイトがあった。マノアの中でも日系は比較的数量が多く、集まりやすい距離に住んでいたため、日本の文化的行事を維持することが可能であったといえよう。

一方、モイリイリは涼しいマノアとは違い、平らな低湿地でむし暑い。砂糖プランテーションを出た日系はモイリイリで様々な仕事につくことができた。モイリイリの歴史を詳しく述べた『モイリイリ (Moiiliili: The Life of a Community)』 (Ruby 2005, 100) によると、1900年はモイリイリの346人の住民のうち188人が日本人、58人が先住ハワイ人、60人が中国人、34人がポルトガル人であったという。つまり1900年のモイリイリの住民は既に半数以上が日本人であったことになる。

そもそも19世紀、先住民はこの土地をカモイリイリ (Kamoiliili) と呼んでいた。1870年代に中国系 (中国系ハワイ人も含めて) がここに住むようになった。1880年代になって、現在のハワイ大学のキャンパスの南側の高速道路H1が通っている近くで採石業が発達してきた (図3参照)。1900年の統計によると、モイリイリの住民の84人が石切り場での採石やその関連職についていたという。そのうち14人の日本人は石切り職人として熟練労働者と数えられており、55人 (うち日本人53人) が碎石の仕事をしていた。日本人は石切り場を当時「石山 (いしやま)」と呼んでいたという (Ruby 2005, 74)。

この時代、モイリイリには小川にそっていくつか池があり、泉が湧き出していた。それゆえ、中国人や先住ハワイ人がタロ芋畑や水田を作っていたのである。日本人は1890年頃からこの地域に入り始め、10家族ほどが一地域に集住して、さながらプランテーションでの「キャンプ」のような日本人集落をいくつもつくった。モイリイリの人口は増加し、特に1920年代は前述した日本人・フィリピン人によるプランテーションストライキの影響で、人口は急増した。日本人の中には商業に従事するものも登場し、キング通りに沿って小売商店を開いた。キング通りは日常必要なものはすべてそろおうという町の中心地になっていった (Ruby 2005, 128)。

## Moiliili

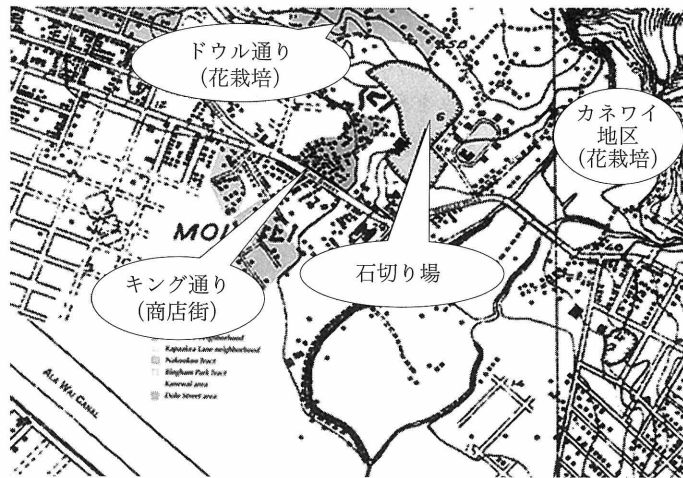


図3 モイリイリの石切り場 Dole通りの花畑 カネワイ地区の花畑  
(Ruby 2005, p. 148より作成)

1930年、モイリイリの人口は2,800~3,000人で、2,485人が日系（ハワイ生まれの子どもも含む）であった。モイリイリの人口の90パーセントは日系だ、といってもあながち大げさでもない、という状況だったのである。日系以外には、中国系、先住ハワイ系（混血ハワイ系も含む）、韓国系、フィリピン系、ポルトガル系が住んでいた。1930年のモイリイリ住民の仕事はさらに多様になった。しかし、1900年の頃と同様ホワイトカラーの仕事についていたものは限られており統計上は77人で、そのうち12人は教員であった。一方ブルーカラー（肉体）労働者は多く、まず、採石業関連が69人いた。また熟練労働者には大工79人、ペンキ屋・左官屋31人、煉瓦職人37人などがいた。その他には、運転手37人、機械工31人、仕立て屋・お針子24人、パイナップル工場労働者10人、沖仲士9人、水道工8人、鍛冶屋6人、警官3人などがいた。また、家内奉公人は110人を数え、富裕層の家庭で食事の支度、掃除、庭仕事、洗濯などをした。また116人が野菜や花を栽培し、豚や鳥を飼育していた。また2人はきこりで、薪を各家庭に供給することで生計をたてていた。薪は当時の日系家庭ではおそらく風呂焚きに使ったのであろうという（Ruby 2005, 128）。

日本人のコミュニティの中心には寺社が建てられた。モイリイリでは1906年に浄土真宗の本願寺布教所（Hongwanji Mission）が活動を始め、モイリイリ西本願寺として知られるようになった。寺は信者の結婚式や葬式などをつかさどり、お盆の祭りも盛大に行った。1920年代にはモイリイリ東本願寺が設立され、その地域の人々の拠り所となった。モイリイリ地区には稲荷神社もあったし、仏教の墓地としてはハワイ最大の日本人墓地も作られた。この墓地には日本の仏教に則った墓石が並び、キリスト教の墓地とは



(Dole Street) やカネワイ (Kanewai) 地区に数多くの花畑が広がっていたため (図3参照) に、キング通りには花屋が集中していたわけだが、「花あふれる首都」と呼ばれた大きな要因は、この地域に花屋に加えて数多くの多様な小商店が並んでいたからでもあると Ruby (2005, 289) は述べている。

#### 4. ハワイの苦難の時代——恐慌、日米戦争、そして戦後

1930年代の大恐慌に引き続く不況時代は、ハワイ住民にとっても苦難の日々であった。二世の中でも年上の者は、すでに成人し社会に出ていた。しかし折からの不況のため、彼らの就ける仕事は限られており、社会の上／中流階層へ上れるような仕事はほとんどなかった。それでも一部の二世の中には、公務員、特に教職に就き、安定した収入を得る者もいた。しかし、1941年12月に勃発した日米戦争によって日系は、それまで日系居住区で保持してきた日本文化を切り捨てなくてはならないところに追い込まれた。戦前からハワイの中流階級に達し始めていた中国系の後を追って、社会的地位を高めつつあった一部の日系一世、二世も、(父母または自分の) 母国と居住国との戦争は、受け入れがたい事実であった。1940年、日系はハワイ全人口の37.3パーセントを占め、ハワイ経済への貢献度も高かった。日本軍によって真珠湾が直接攻撃されたにも拘わらず、日系の強制収容は行われず<sup>(10)</sup>、ハワイは軍政下におかれた。多人種／エスニック社会を織りなす各エスニック・グループは政府当局のもと戦時協力体制をつくった。開戦当初は軍人として不適格とされてしまった日系二世の若者は、アメリカ軍で戦うことを希望し、その道が開けると多くが志願、ヨーロッパ戦線、太平洋戦線いずれにおいても類まれな功績をあげたことはよく知られている。

戦前から戦後にかけてのハワイの産業や経済構造の変化に注目すると、第一次大戦後からハワイにおける軍事基地は拡大し続け、1940年までには48,000人の軍人がハワイに住み、14,000人の軍関係労働者が基地で働いていた。両方で軍関係者はプランテーション関係の労働者の数をすでに超えていた (Goss and McGranaghan 1996, 152)。ホノルルには増加した軍関係者のための住居が次々と建設された。そして戦争中は、ハワイの人口は軍人の流入により2倍になり、軍事支出は急増した。そして戦争が終わっても、軍事産業はハワイ経済において重要な役割を果たし続けた。それは大戦後の冷戦の激化で、ハワイが軍事的な要衝として重要視され続けたからである。

一方戦前長い間ハワイ経済の中心であった砂糖産業は、戦時中にその地位を軍事産業に譲っていた。同様にパイナップル産業も後退していた。他方ではハワイの観光リゾート地としての側面が戦後ますます注目を集め、1959年にハワイが準州 (Territory) から州 (State) に昇格すると、ハワイを訪れるアメリカ本土や諸外国からの観光客が増加した。その結果1970年代には観光業が軍事産業を抜いて、ハワイ州の収入源の1位に躍り出た。また投資ブームはハワイ経済に多大なる影響を及ぼした。アメリカ本土から多

くの年配者が老後をハワイで過ごすために移住してきたことも影響し、住宅／ホテル建設はハワイの重要な政策の一部となっていく。ホテル、アパート、コンドミニウム、レストランなどの建設に多くの投資が集まった。ホノルル中心地区での高層ビルの建設や郊外の一戸建て住宅建設の計画は次々と進んだ。1950年代にはホノルル市内にあった農地は宅地へと姿を変えた。郊外化と再開発の波はホノルル市とその郊外の景観を変貌させてしまったのである。

砂糖栽培が衰退するにつれ、砂糖を中心にハワイ経済を動かしてきた五大財閥ビッグファイブもプランテーションを閉鎖し、盛んになりつつある観光業にその土地を使う術を探り始めた。ゴルフ場、リゾート、ホテル、コンドミニウムなどの建設・経営など、ビッグファイブは多角経営へと方針を変え、郊外に住宅を探し始めたハワイ住民のために、ホノルル郊外で大規模な宅地開発をいくつもてがけた<sup>(11)</sup>。このようなハワイの産業構造の変化、特に観光業や宅地開発の急激な発展が、ホノルル市内にエスニック居住区を形成していた日系に与えた影響は甚大なものであった。

## 5. ハワイの産業構造の変化——マノア、モイリイリの居住者たち

マノアで野菜や花を栽培していた日系農民やヴィレッジの小売業者たちは、日米戦争から戦後への時代の変化に対応しなくてはならなかった。日米戦争勃発後、ハワイでは日本的な組織は解体をせまられ、親日的とみなされた一世や帰米二世のリーダーはアメリカ本土やハワイ内の収容所に連行された。日本語と日本文化を二世に教えていたハワイ中の日本語学校は閉鎖された<sup>(12)</sup>。マノアでも日本語学校は閉鎖され、校長は親日派として収容されてしまった。これは日系エスニック居住区の存続の危機であった。マノア日本語学校の校舎は戦争中、救急診療所と地区長の本部として使われた。他の多くの日本語学校校舎がキリスト教会やその他の非営利団体に寄付されてしまったのとは異なり、マノア日本語学校はマノアに住む5人の一世の共同信託のもとにおかれた。後にハワイ州知事になるジョン・A・バーンズ（John A. Burns）は建物を寄付するよう信託人たちを説得したのだが<sup>(13)</sup>、信託人は校舎の譲渡を遅らせることで、建物を所有し続けた。マノアの日系リーダーらが日本語学校を大事な文化的な財産として保持し続けようとした強い意志が窺われる<sup>(14)</sup>（Manoa Residents 1994, 16）。

既述の通り、軍人や軍関係の民間の労働者がハワイに多数流入し、特に戦争中ハワイの人口は急増したため、新住民用の新しい住宅をハワイ住宅公社（Hawaii Housing Authority）がマノア地域に建設した。これはマノア地域住民全体の反対を押し切る形で進み、約4,000人収容の住宅が完成した。当時マノアの一戸建て住宅は平均して7,500～10,000平方フィートの広さがあったのに対して、この戦時用住宅は各区画も住居も小さく、その後ホノルルで展開される住居の開発を先取りしたようなものであったという（Manoa Residents 1994, 141）。実際この住宅が使用されたのは1946年から朝鮮戦争終了

までであった。

1948年にはマノアの農地の地主が新宅地開発に着手した。マノアで農業を営んでいた日系は借地農であったので、地主の要請により土地を返さねばならなかった。その結果、戦後20年の間にほぼ全ての日系経営の農場がマノアから姿を消してしまい、跡地には小奇麗な一戸建て住宅、公園などの施設が建設された。マノアを出た日系は、他の土地へ移って新たに自営農を始めたり、他の仕事に就いたものもいたが、年配の一世にはこれを機に引退する者もいた。こうして戦前にマノアにあった日系のエスニック居住区は静かに消えていったのである。その後マノアは中流階層の住む宅地として開発が進み、新たな住宅に住む新しい住民が入ってきた。その中には高等教育を身に付け、高収入の仕事を得て移り住んできた日系二世、三世の家族があった。現在マノアにはホノルル市全体平均より高い率で日系が住んでいる。しかし彼らの多くは戦前からの居住者ではなく、戦後の宅地に移り住んできた者なのである。

一方、一時は日系人口がその90パーセントを占めるとまでいわれたモイリイリの日系居住区は戦中・戦後、どのように変化したのであろうか。日本軍によるパールハーバー攻撃の際、アメリカ軍の対空砲火弾がモイリイリやマッカーイー地区にまで飛んできて10軒以上の家屋を直撃し火災となったことはよく知られている。そして日本語学校の校長／教師や神社の神官、日本語新聞の記者といったコミュニティ・リーダーと目された人々（一世や婦米二世）が、親日分子としてFBIに連行され、収容されてしまった。しかし、残された人々はアメリカ軍への奉仕活動を積極的に行った。一世女性は閉鎖された日本語学校で、病院用の上履きスリッパを作ったり、軍人用のセーターやソックスを編んだ。年配の一世にとっては、自分の祖国日本との戦争で、日本語で話すことも憚られる状況になっていたが、自分の第二の祖国アメリカのために戦時協力を惜しまなかった。二世が軍隊への参加が認められる前は、大学生たちは大学勝利奉仕団(Varsity Victory Volunteers)として、塹壕掘りなどの銃後の協力をし、日系志願兵の募集が始まると多くが志願して戦場で戦った。

戦後の経済好況の中、モイリイリも変化を始めた。GIビル(G. I. Bill)のおかげで復員兵は高等教育を受ける奨学金を得られたため、ハワイ出身の復員兵の中にはハワイ大学に入学するものもあり、多くモイリイリ地区に住むようになった。1950年代モイリイリ地区の人口は40パーセント増加した。住宅建設が急務になったホノルル市は、この地域のゾーニングを「農地」から「都市」へ切り替えた。その結果、2、3階建ての低層集合住宅が多数建設され、多様なエスニック背景を持つ新住民が増加した。さらに、戦後の経済成長に対応し、高速道路の建設計画が持ち上がり、モイリイリを高架の道路が通ることになった。その用地となった石切り場の近くの商店や農地では住民が立ち退きを迫られた。そもそもドウル通りの花畑はハワイ大学キャンパスの拡張に伴って、持ち主が立ち退かされたり、花卉業を廃業して引退するようになっていた。カネワ



イ地区にあった花畑も、住宅地やカネワイ公園、学校などに区画整理され、消えてしまった。戦前「ホノルルの花あふれる首都」と呼ばれたキング通りの花屋は、近郊にあった花の供給元を失っていった。しかし、花屋はキング通りから消えなかった。それは交通手段の発達のおかげで、他島やアメリカ本土から花を取り寄せられるようになったからである。数は少なくなったが、現在でも花屋は健在である。しかし、今キング通りにある花屋はどれも50年前とは持ち主が変わっているといわれる。モイリイリで農業をしていた一世は、時代の流れとともにこの土地から去っていった。キング通りの小商店も、以前ほど日系の商店ばかりではなくなった。しかし、花屋などはモイリイリの新しい多様なエスニック背景をもつ住民を顧客として存続しているのである。そして戦後新たに作られた小規模な集合住宅に住むようになった新しい日系家族もいるのである。

## 6. 結論にかえて——ホノルル日系住民のエスニック居住区の現在と未来

ハワイへの移民労働者はどの国から来ようともまず港に着くと、都市から離れた「田舎」の砂糖プランテーションに振り分けられ、プランテーション会社が人種／エスニック・グループごとにつくったキャンプに住んでハワイ生活を始めた。契約労働者の場合は契約が切れてから都市に出だし、自由労働者であったとしても、自分の意志で都市に出るのは十分に蓄えができて町で事業を始める用意ができてからであった。アメリカ本土に19世紀末から20世紀の初頭に大量に流入した新移民にとっては、都市の低賃金労働者として家賃の安い低廉な住宅に住むことがアメリカ生活の第一歩であったのと比較すると、ハワイの労働移民は本土とは異なる経験をしているのがわかる。またプランテーションでのエスニック別分断統治の影響は都市に移動した後の彼らにもおよび、都市においてもエスニック居住区を形成することが多かった。さらにホノルル市がゾーニング法などによって特定の階層やエスニック／人種グループしか住めないような宅地を開発していったため、労働者階級の非白人グループの大多数は、高台にある住宅地に居を構えることはできなかったという事実もある。特にストライキなどの影響で一気に都市に流れ込んだ日系などは、ホノルルの中で日系の多い地区をいくつも生み出した。マノアやモイリイリの日系エスニック居住区はその例であった。このようなエスニック居住区の中では、母語や文化という共通項を持つものが近くに住んで助け合い、長い間母国の独特な言語文化を保持することができた。

二つの戦争を経て、ハワイ自体の産業構造の急激な変化にさらされ、エスニック居住区も変化してきた。ホノルル市内で農業に従事していた一世は宅地開発のために農地を後にしたり、大工、庭師、家内奉公などをしてきた一世は引退した。高等教育を受け技術を身に付けた二世、三世世代は、ホワイトカラーの仕事を得て、新たに開発された住宅地に新居を求めた。カイルア (Kailua)、パールシティ (Pearl City)、ミリラニ

(Mililani)などは郊外の新興住宅地の良い例である。確かに戦前のマノアには日系エスニック居住区があった。それは、同じマノア地区の欧米白人の住む邸宅の並ぶ閑静な住宅地とは近くにありながら全く異なる、まさに日系文化の色濃い「居住区(enclaves)」であった。一方、戦前のモイリイリはその広い地域全体が日系居住区だったといっている。最近のマノアでは1990年に全体人口の47パーセント、2000年37パーセントが日系であり、モイリイリでは1990年39.5パーセント、2000年37パーセントが日系である。2000年のセンサスで混血を含めて自らを日系とした人はハワイ全体人口の23パーセントほどであるから、マノアもモイリイリも日系の割合が全体平均より大きい。しかし現在のマノアに住む日系家族は、戦前に東マノアやマノア高地に住んでいた人々とは異なるのである。現在の日系家族は1960年代から70年代にマノアの新興住宅地に移り住み、他のエスニックの住民の中に溶け込んでいる。しかし、戦前の日系居住区の象徴的存在であったマノア日本語学校が現存し、機能していることは興味深い事実である。

モイリイリはマノアと異なる傾向を示している。Chow (1983, 177)の述べるように、郊外の新しい高級マンションや大きい一戸建て住宅に移る余裕のある人でも、子どもたちが独立して一緒に住んでいなくとも、ほとんどの居住者は自分の住む地域に愛着心を持っているのである。

モイリイリは戦前日系のエスニック居住区であり、都市の中にあつた「田舎町」のような場所であつた。現在モイリイリは、高層リゾートホテルの建ち並ぶワイキキにも、役所やビジネスビルの立ち並ぶダウンタウンにも近く、非常に便利な場所にある。モイリイリ自体は住宅街であり、一部ビジネス街でもある。戦後すぐに建った低層集合住宅が多い中に、いくつか豪華な高層コンドミニアムも建っている。モイリイリには現在も日系が多く、彼らの中にはこの地域に対する特別な愛着、感情を持っている人がいる。また古くからハワイに住む人はモイリイリを「日本人の地域」として記憶しており、そこに象徴的に日系を代表するようなもの、たとえば日系商工会議所 (Japanese Chamber of Commerce) や日本文化センター (Japanese Cultural Center)、本願寺 (Hongwanji Temple)、日系墓地 (Japanese Cemetery) などが存続することを望んでいる。モイリイリという場所自体が日系と密接に関わる象徴的意味をもっているようである。郊外の住宅地に住む余裕のある人々がモイリイリに住むことを選ぶというのは、より高い社会的地位を目指すというアメリカ人の特徴と矛盾するのかもしれない。しかしその一部の人々にとっては、モイリイリという場所に対する愛着心やモイリイリという場所の持つ象徴的意味の方が、中／上流階層のための山の手地区に移住することよりも重要な意味を持つようである。

以上のように、マノアとモイリイリという戦前に日系居住区を持っていた二つの地域を通してホノルルの変化をたどってみると、移民の「同化」は都市の下町(ダウンタウン)のエスニック居住区を少しでも早く脱出して郊外の閑静な山の手(アップタウン)

に移住することで完結するという考え方は、直線的で単純すぎるようだ。確かに多くの場合移民はそのようなプロセスをたどってきたのではあるが、ハワイのように移民がプランテーション・キャンプを起点とし、その後都市に流入し、さらにその後郊外へ移住していくというプロセスをとってきたことに注目したり、モイリイリのように住民が土地に強い愛着心をもって住み続けることがあることについても、より深く考えてみる必要があるだろう。

#### 注

- (1) 本稿はアメリカ学会第42回年次大会（2008年6月、同志社大学）のワークショップ B From Downtown to Uptown: Social Mobility in Ethnic Communities において、ハワイの日系人に関して筆者が行った英語報告“Social Mobility of Japanese Americans in Hawaii: Manoa and Moiliili in Honolulu”の原稿をもとに、日本語論文としてまとめ直したものである。
- (2) ビッグファイブとは砂糖産業全般、つまり砂糖の栽培から砂糖の収穫、粗糖の圧搾、さらに収穫物や製品の運搬まで手掛け、関係する企業はすべて自分の傘下においた、5つの財閥、Castle and Cooke, C. Brewer, American Factors, Theo H. Davis, Alexander and Baldwin のことである。これに Dillingham を加え、実際には6つの財閥があったことが知られている（Kent 1983, 70）。
- (3) Glick (1980, 14) によれば、ポルトガル人の移民は1877年に始まり、1880年代に家族連れのポルトガル人労働者を主にアプレス諸島などから遠路はるばるやってきた。中国人や日本人の移民労働者と異なり、その目的は「出稼ぎ」ではなかった。
- (4) 両国政府間の条約によって始まったこの移民を官約移民とよぶ。これは1894年まで続き、その後は民間の移民会社による私約移民となった。
- (5) つまり中流階級が不在であることを意味するのであった。
- (6) Lind (1982, 135) が述べるように、ハワイではプランテーションがハワイ独特の「人種 (races)」という概念を生み出したという指摘は興味深い。
- (7) だがこの時期になると、ホノルルの他の地域に農業や漁業に従事するために住む中国人も増えてきており、ホノルルに住む中国人のすべてがチャイナタウンに住んでいたと考えるのは誤りである。
- (8) 朝鮮半島出身者も1910年には4,500人余りが居住している。多くがプランテーション労働者と思われる。
- (9) ドウス昌代『日本の陰謀 ハワイ・オアフ島大ストライキの光と影』（文藝春秋社、1991年）を参照。
- (10) アメリカ本土では西海岸に居住した11万以上の日系人が大統領令9066号のもと内陸部に設営された10か所の転住所 (Relocation Centers) に強制的に収容されたことは周知の通りである。また、これらの収容所とは別に戦時中に敵性外国人でアメリカにとって危険と判断された人々が収容された、司法省下の敵性外国人収容所が8か所あった。ハワイでは、本土のような全員の収容は行われなかったが、日系社会のリーダーと目された一世や帰米二世が1,500人ほどアメリカ本土やハワイの収容所に収容されている。
- (11) ハワイの最大の地主はビショップ地所 (Bishop Estate) と言われるが、ビショップが手がけた新住宅地は、実はまだ借地として貸し出しているだけの場合が多い。
- (12) 1940年の統計で、ハワイ諸島には日本語学校が200校あった。

- (13) バーンズは第二次大戦中警官として、ハワイに住む多様な人種／エスニック・グループ間の協調をはかるため作られた Moral Committee と関わった。神社や日本語学校の建物を非営利団体に寄付させるように尽力したため、バーンズは一部の一世たちから嫌われることもあった。しかし、特に日系二世グループとの親交が Moral Committee の活動から生まれ、戦後ハワイ民主党を日系政治家とともに盛り立てていく基盤がこの時できたと言っても過言ではない。
- (14) この結果、マノア日本語学校の校舎はどこからも接収されないまま戦後を迎え、日本人コミュニティの財産として、新たな学校の一步を踏み出すことが比較的早く行われることになった。まさにマノアの日系一世の努力の賜物であった。

### 参考文献

- Beechert, Edward D. 1985. *Working in Hawaii; A Labor History*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Chang, Jeff. 1996a. Lessons of Tolerance: Americanism and the Filipino Affirmative Action Movement in Hawaii. *Social Process in Hawaii*. Vol. 37. pp. 112-146.
- Chang, Jeff. 1996b. Local Knowledge(s): Notes on Race Relations, Panethnicity and History in Hawaii. *Amerasia Journal*. 22: 2, 1-29.
- Chow, Willard T. 1983. Urbanization: Six Propositions. in Joseph Morgan ed., *Hawaii: a Geography*. Boulder: Westview Press.
- Choy, Ellen et. al. 1977. Moiliili: An Historical Analysis, 1900-1945. Phase II. A Research Project Submitted to the School of Social Work of the University of Hawaii.
- Coulter, John Wesley and Alfred Gomes Serrao. 1932. Manoa Valley, Honolulu: A Study in Economic and Social Geography. *The Bulletin of the Geographical Society of Philadelphia*. v. 30, no. 2.
- ドウス昌代 1991. 『日本の陰謀 ハワイ・オアフ島大ストライキの光と影』文藝春秋社.
- Kent, Noel J. 1983. *Hawaii: Islands Under the Influence*. New York and London: Monthly Review Press.
- Fuchs, Lawrence H. 1961. *Hawaii Pono: A Social History*. A Harvest/HBJ Book.
- Glick, Clarence E. 1980. Sojourners and Settlers: Chinese Migrants in Hawaii. Hawaii Chinese History Center and The University Press of Hawaii.
- Goss, Jon. And Matthew McGranaghan. 1996. Urbanization. in Joseph Morgan ed., *Hawaii: a Unique Geography*. Honolulu: Bess Press.
- Higa, Brian K. 1977. Moiliili: An Historical Analysis, 1945-1976. A Research Project Submitted to the School of Social Work of the University of Hawaii.
- 久武哲也 1995. ハワイにおける砂糖キビプランテーションとエスニック構造の多様性. 多民族社会における異文化交流と社会構造の変容に関する研究会編 『1920年代ハワイ日系人のアメリカ化の諸相』同志社大学人文科学研究所.
- 久武哲也 1999. ホノルル大都市圏におけるエスニック構成—プランテーションの遺産と制度的人種主義. 成田孝三編 『大都市圏研究(上)—多様なアプローチ』大明堂. pp. 356-384.
- 飯田耕二郎 2003. 『ハワイ日系人の歴史地図』ナカニシヤ出版.
- Lind, Andrew W. 1980. *Hawaii's People, Fourth Edition*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- Manoa Valley Residents. 1994. *Manoa: The Story of a Valley*. Honolulu: Mutual Publishing.
- Menton, Linda and Eileen Tamura. 1989. *A History of Hawaii*. Honolulu: Curriculum Research & Development Group, College of Education, University of Hawaii.

ホノルルにおけるエスニック居住区の形成と変化 (高木(北山))

- Moriyama, Alan T. 1982. *Imingaisha: Japanese Emigration Companies and Hawaii, 1894–1908*. Ph.D. dissertation in History submitted to University of California, Los Angeles.
- Nordyke, Eleanor C. 1989. *The Peopling of Hawaii, Second Edition*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Ruby, Laura, ed., 2005. *Moiliili: The Life of a Community*. Honolulu: Moiliili Community Center.
- Trouman B. Judith. 1976. *Moiliili: An Historical Analysis, 1900–1945. Phase I. A Research Project Submitted to the School of Social Work of the University of Hawaii*.

